

# 俳人小説 猿岩山の風

さるいわやま

大森 耀 平

白帷子に顔をうずめた真紀の顔を凝視して、真実美しいと洋平は思った。

洋平が真紀の顔を見るのは四十年ぶりなのにその歳月を思わせなかった。若いときの面影をそのままに、どちらかと言うと童顔で、髪も黒く、思っていたよりはずっと若々しかった。病魔に侵されて三年経ったと聞いていたが、そんなやつれは見せていなかった。

うつすらと化粧を施しているのである、少し紅をさした頬には笑みさえ浮かべているようだった。少女の頃の、あの涼やかな眼差しをもう一度見たい。叶うなら今、目を開けて欲しいと思う洋平だった。

親友の正次が電話で知らせてきて、洋平が真紀の死を知ったのは昨夜のことだった。こんなことになるのだったら、一度会っておくべきだったと後悔する洋平だったが、今、真紀に会わなかったら、永遠に顔を見ることはできなくなる。一度は参列をやめようと思っただが、思い直して告別式に出ることにしたのだった。

葬儀はM町の郊外にあつてまだ新しいセレモニー会場だった。

少し早めに着いてしまった洋平が会場に入ると、祭壇の前で棺を取り囲んでいた遺族と思われる数人の中から、一人の女性が洋平の存在に気づいて近づいてきた。

「洋平さん、よく来てくださいました」

「あつ、亜矢さん。この度は……」

そう言うと言葉に詰まってしまった洋平に

「どうぞこちらへ。真紀姉さんの顔を見てやってください。洋平さんは姉にとってかけがえのない人なんですから」

思いもかけないやさしい言葉だった。

「ありがとうございます。ではお別れをさせてください」

棺の小さな窓を開けて、覗いた洋平の顔がたちまちゆがんできて、溢れそうになる涙を必死に堪えていた。真紀の顔を見ているうち、洋平は自分のこのひらの中にあつた、おぼろげで大切なものが、今、はっきりとした輪郭を現してきたと思つた。

これで永遠に逢うことのできない真紀となつたが、かえって、真紀が洋平の胸の中に住み着いた……そう思う洋平だった。

会場にはエレクトーンが物悲しく緩いテンポの曲を流していた。故人の愛唱歌を演奏中という。たどたどしい演奏だったが、聞き覚えのある曲だった。よく聴いていると、ずっと昔、真紀がいつも口ずさんでいた、『寒い朝』という、確か吉永小

百合の歌だったことを思い出した。今どきの若い奏者がこんな古い曲を知っているはずもない。初めて弾くのであるうか、そのたどたどしさが一層悲しさを誘っていた。

正面の大きなスクリーンには、生前の真紀の写真が次々に映し出されていた。それは旅の写真だったり、子供たちや孫とのスナップだった。洋平には若いときの真紀の姿しか記憶に無い。だから、スクリーンの中の人物や風景は、どれも知らない世界だった。

この日、葬儀に参列した中学の同級生は正次と妻の孝子、そして洋平の三人だった。

「これで六人逝ってしまったよ。だんだん淋しくなる……」

と、正次が言った。それを慰めるように孝子が言った。

「でも、みんながんばって精一杯生きてきたんだよね。それにしても洋平君と真紀が結婚しなかったのはクラスのミステリーだったわ」

三人の喪服姿をまだ寒い早春の日差しが包んでいた。

数日後。M町の真紀の家からさほど遠くない県道脇の清徳寺の境内に洋平の姿があった。

告別式の日には親族ではないので、埋葬に立ち会うことを遠慮した洋平だったが、巫矢から聞いていたので寺はすぐに分かった。本堂裏のすぐ右手の墓地に真紀が葬られていた。

香りの強い百合の花が供えられていたが、抱えてきたアスターの花束を加えて罎菰桶から水を掬って静かに注いだ。華やかな花よりも楚々とした花の方が真紀にはふさわしいと思うからだった。涙が自然に湧いてきて、そのまま長い時間思い出に耽っていた。

焚いた線香の煙が淡い影を揺らしていた。新しい墓標に黒々と書かれた真紀の名を、一字一字食い入るように見上げたとき、もう洋平の目には涙はなかった。

「これからは絶対に離れることはないよ。真紀は僕の胸の中に永遠に生きることになるんだからね」

「これからは、ずうっと一緒だよね」

と、そう言っている真紀が目の前にいるような気がしていた。

山間の小さな中学校での、真紀と洋平の出会いは今も五十年前のことになる。それからひそかに思いあっていた愛が、今、終わろうとしているのではない。誰にも遠慮しないでいいこれだから永遠の愛の出発になるのだ、と自分に言い聞かせ、真紀に語りかける洋平だった。

近くの小学校から子どもたちの元気な声が聞こえてきた。その声にふるさとの少女と少年だった二人の姿が蘇ってきた。

懐かしさに目を上げると、遙かな北の空にまだ雪の残る日光連山が見え、一際そびえる男体山の姿があった。それら春嶺の彼方に、洋平は静かに目を向けていた。

\*

栃木のT町に小さな小学校が二つあった。洋平は山木小学校から、真紀は秋川小学校からそれぞれ三十数人の同級生たちと、葛原中学校に入学したのは、昭和三十年代初めの春だった。

七十人は二クラスに分かれたが、洋平と真紀は同じクラスになった。おさげに結った髪のかわいらしい顔立ちの真紀にクラスメイト以上のものを意識するようになった洋平が声をかけるようになった。

真紀は真紀で、兄のような優しさを感じて洋平と会話するようになっていた。

軟式テニスのキャプテンとなった洋平の姿をまぶしそうに眺める真紀は、ソフトボール部で元気な姿を見せていた。

三年生の夏休み。担任でありテニス部とソフトボール部の指導をしていた岡野先生と、家庭科の山口先生の発案で一泊二日の合宿練習をすることになった。

集まったのは男女合わせて二〇人。午前中はテニス部のボールを打つ快い音が響いた。

洋平と正次のペアが抜群の強さを発揮していた。

テニス部の練習が終ると校庭の隅の緑陰でそれぞれ持ってきた弁当を広げた。昼寝の後、テニス部と合同でソフトボール部の練習。キャッチャーの真紀の元気な声が校庭いっぱいに響いていた。

ピッチャーの孝子は速球派ではなかったが、真紀のリードでコーナーをつく配球が際立っていた。打席に立ったテニス部の男子もことごとく内野ゴロに打ち取られ、外野へは正次の詰まったレフトフライだけだった。

夕食は、みんなが持ち寄った野菜と先生たちの差し入れの豚肉でカレーを作った。ちよつと水っぽい出来上がりだったが、みんな腹いっぱい食べた。

その夜のことだった。校庭の真ん中に小さな櫓が組まれて、青年団の盆踊りが開かれた。どうやら先生たちの計らいでこの日の合宿になったようだ。

浴衣がけの教頭先生が現れて、みんなに「日光和楽音頭」の踊りを教えてくれるという。教頭先生は若い頃、日光に赴任していたので「手踊り」「手ぬぐい踊り」「石投げ踊り」なんでもござれだった。元気な「石投げ踊り」は男子に人気があつて、夜の更けるのも忘れて踊った。

かなり離れて踊りの輪の中にいた二人だったが、見ると昼間の活発な真紀とは思えない、おしとやかでしなやかな仕草を見せていた。もともとやや小柄で色白の真紀だ。少し音の割れたスピーカーの音も、薄暗い裸電球の火影もどれも真紀のかわいらしさを引き立てている道具立てに過ぎないと、そう思う洋平であった。

女子は山口先生と畳敷きの家庭科室、男子は体育のマットを敷き詰めた教室で岡野先生と寝ることになったが、昼の練習と盆踊りの疲れであつという間に寝入ってしまった。

夏休みも終って、早くも二学期になっていた。

三年生ともなれば受験を考えるようになる。柿が赤く熟れた秋の深まった頃には、県立高校を目指そうと決心を話し合う二人だった。お互いの家は県道の小さな峠を挟んで三キロほどの距離にあった。話し合って二人は受験勉強を一緒にやることにした。

下校してから畑仕事や家事の手伝いの後、夕食を済ませると洋平は参考書を持って自転車で真紀の家に向かった。まじめそうな洋平を真紀の家族は歓迎してくれた。山峡の夜の帳はあつという間に訪れる。せいぜい一時間か二時間の勉強だったが、勉強とは名ばかりで会話そのものが楽しいと思う二人だった。

戸外に木枯しが吹いていても燠火を使った掘り炬燵は汗ばむほど暖かかったし、時には真紀の母が藪や餅を焼いてくれたり、大根の浅漬けなどを差し入れてくれて、それを食べることも楽しみになっていた。

時には妹の亜矢が、お邪魔虫のように現れて会話に加わろうとした。チョコレートが好物だと聞いた洋平が、何度かお土産にして亜矢にあげたものだから、いつか「洋平兄ちゃん」と呼ぶようになっていた。

「洋平兄ちゃんとお姉ちゃんはいっ結婚するの」

おませな六年生の亜矢がそう言って、赤面する二人の顔を覗き込んだりした。

「洋平君。この間の模擬テストの成績どうだった？ 私、岡野先生に、これなら合格できそうだと、言ってもらったわ。洋平君のおかげよ」

「そんなことないよ。真紀ちゃんの実力だよ」

年が明けていよいよ高校受験を身近に感じるような頃には、二人の間でこんな会話が交わされるようになっていた。

洋平の父はしががない地方公務員で、定年も近かったから、洋平にはあまり学費のかからない県立高校への進学を望んでいた。

真紀の家は少し田畑があるものの、収入のほとんどは父の山仕事の請負だった。三歳下の妹、亜矢も進学させたい、そんな真紀の家でも県立高校の進学を望んでいた。

合格発表の朝。洋平も真紀も合格していた。親友の正次は洋平と同じ高校、学科は違ったが孝子も真紀と同じ高校に合格していた。そのことが二人の気持ちを高ぶらせていた。

そして洋平は、将来、真紀と結婚して一緒に人生を歩みたいと思うおぼろげなもの、確信に変わってゆく思いに浸っていた。洋平にとっては、そのことがあって、この日が記念すべき日であった。

入学式を翌日に控えた日。受験勉強を一緒にやってくれた洋平のおかげだと、真紀の母が赤飯を炊き重箱にぎっしり詰めてくれた。その重箱を持って、珍しく降った四月初めの雪の道を自転車に乗って来て真紀がやってきた。

上着の細いタイも、折り目の鮮やかなひだスカートも似合って、大人っぽくなった真紀の姿が眩しかった。

転んで制服が汚れては一大事だからと、母のサチに送っていくように言われた洋平は、自転車を押して、肩を並べて真紀の家まで歩いて行った。

雪晴れの青空が広がっていた。路の脇には、紅椿の花が積もった雪の下で燃えるように咲いていた。

成人の日。快晴であったが成人式に出席する若者たちに強い風が吹いていて、せっかく着飾った出席者たちの和服の裾を乱していた。

町の公民館に集まった成人は百人ほどだった。その中に二人と同じ中学の出身者は男女数人ずつだった。卒業と同時に県内の他の町や東京に就職した者が多かったから、仕方のないことだったが淋しいことだった。

ちよつと退屈な式典が終ると、正次の車に便乗して二人は洋平の家に着いた。

サチがどうしても真紀の晴着姿を見たいと言い出して、帰る途中で寄ってもらうことにしたのだった。

真紀は髪をアップに結び上げ、純白の髪飾りをしていた。振袖は牡丹と御所車を描いた友禅。ややアンテークな図柄だが、色白の真紀には似合っていた。金銀をあしらった西陣の袋帯を二重太鼓に結び、赤い絞りの帯揚げが初々しさを強調していた。

あでやかな真紀の姿にサチはしばし見とれていた。

「二人そろって県立高校が受かったとき、新しい制服を着て見せに来てくれたわね。あのときの真紀ちゃんの、ひだスカートの制服を昨日のように覚えてるわ……」

でも、今日の真紀ちゃんはずいぶん大人らしくなったわね。洋平の相手にはもつたないくらい。お父さんもお母さんも手放したくないでしょうね」

サチはため息をつくように言った。

「まあ、上手に着付けてあるわね。どなたに着せてもらったの」

「母です。でもちよつと窮屈で」

「あら、それは困ったわね。ちよつと直してみましようか」

そう言うとサチは、真紀を姿見の前に立たせて後ろに回ると、腰紐を少し緩め、おはしよりを直した。

「これでどうかしら」

「ありがとうございます。ずっと楽になりました」

「楽になったところでお寿司を用意してあるからたくさん食べてね。珍しく洋平が早起きして作るのを手伝ってくれたの」

赤い田麩のチュールリップと炒り卵の黄色いタンポポに見立てた、茹でたホーレン草が葉っぱの太巻き寿司だった。

「それからね。真紀ちゃんにお礼が言いたいことがあるの。洋平は字が下手で、よく岡野先生に注意されていたの。テストでも、答えは合っているのに、あまりにも字が汚いので採点できないって。

それがね、高校生になったとたん、ずいぶんと綺麗な字を書くようになってびっくりしたわ。それは、真紀ちゃんと文通しあうようになってからだわね。真紀ちゃんは綺麗でかわいい字を書くので、洋平は恥ずかしかつたのね。こっそり練習していたみたい」

会話が進んでゆくうち、偶然にも真紀とサチの誕生日が同じだと分かった。八月二十八日が二人の誕生日だったのだ。

「乙女座よね。真紀ちゃんと私とは仲良くなれそうね。是非とも洋平のお嫁さんになって頂戴ね」

「でも、洋平君からまだプロポーズされていません」

二人の笑い声が冬障子の明るさの中に弾けていた。

\*

中学校の近くにある料理屋といえ、食堂兼仕出し屋の店が一つあるだけ。それでも二階に四十人席ほどの宴会場があった。ここがクラス会の会場になった。幹事をつとめる正次と孝子は大いに張り切っていた。招待に応じて出席した教師は岡野先生だけだったが、先生を中央にしてみんな自由な席に着いた。膳には料理のほか、男にはお銚子、女にはジュースが付いていた。孝子が気を利かしたように洋平と真紀を並べて座らせた。

幹事の正次の、卒業八年目となった挨拶と集まってくれた三十人への感謝が述べられ、促されて岡野先生の挨拶が続いた。鬢には白いものが見えたが、元気そうで嬉しそうな表情を見せる先生だった。

さすがに気心の知れた同級生たちだからすぐに和やかになって、あちこちに固まって話題に花を咲かせていた。みんな二十二から二十三歳になっていたからすでに結婚した女性も二人いて、一人は間もなく出産ということだが今日は二人とも欠席だった。

話題の中心はもっぱら正次と孝子の間もない結婚のことだった。意外に真紀と洋平のことは知られていないようだ。宴半ばを過ぎた頃、正次に手招きされて洋平と真紀が先生の前に座ると、

「先生、この二人はまもなく結婚すると思います。そのときはお仲人をしてください」

「おお、そうかそうか。それはいい。喜んで引き受けるよ」  
そう言って相好を崩す先生だった。

もうそろそろお開きの時刻になって、みんなで歌を歌おうということになった。当然歌う曲は、当時流行っていた「高校三年生」だろうと思った洋平だったが、正次が選んだのは意外にも「星影のワルツ」だった。

思えば出席者の大半は中学卒業だけで働きに出た者ばかり。こうした気配りができるのは正次ならではあった。

合唱が終わると正次が立ちあがって、

「提案があります。明日、みんなで猿岩山に登ろう。もちろん都合のつく人だけでいい。校庭に十時でいいかな」

賛成、賛成とあちこちから声が上がって宴はお開きとなった。

真紀の家は県道から少し入ったところにあった。見上げると満天の星が輝いて、一月の寒気が襟足に心地よかった。

手をつないでいた洋平が急に真紀の肩を抱きしめた。そしてぎこちない仕草で唇を重ねた。生まれて初めての接吻ではあったが、甘みを感じるより、何だか照れくささが先にたっていた。

「将来、何年先になるか分からないけど、真紀ちゃん、僕と結婚してくれないか」

「いつかそう言ってくれると思っていたわ。でも、あまり長いと私、おばあちゃんになってしまうから」

そう言うと、真紀は少し笑ったようだった。

翌朝は山峡の空が突き抜けるように澄み切っていた。三々五々集まったのは十五人ほどだった。町役場に勤めている正次はさすがに要領よくてゴム長を履いてきた。

猿岩山とはみんなが勝手に付けた名で、実際には連なっている山々の尾根の一部に過ぎない。雑木林と杉の木立を登ると樹木のない尾根に出る。そこには猿がうずくまったような形をした岩があって、みんないつしか猿岩山と呼ぶようになっていた。

校庭からは沢伝いの林道からすぐに登ることができた。頂上への林道は霜柱が立っていて踏んでゆくと微かに金属のような音がした。ことごとく葉を落とした雑木林には冬の日差しがきらめいていた。枯草の中に冬の青草が点在し、しきりに小鳥の声がしていた。杉木立の中に入ると踏んでゆく杉落葉の匂いが立ちのぼって来た。林道は狭い道幅だが洋平と真紀は一番後ろを並んで歩いた。ときどき腕や肩が触れ合うことに嬉しさを感じていた。

やがて沢に出て丸木橋を渡る段になった。先頭を歩いていたゴム長の正次が心得たように先に渡ってみんなをエスコートした。洋平は真紀の手を取って渡ったが、強く握った手の温もりが妙に嬉しかった。最後にぴよんと跳ぶように渡りきった真紀の体が洋平の胸に抱きとめられていた。みんなが一斉に噓し立てて思わず顔を赤らめる真紀だった。

急峻な場所に出ると極端に路が狭くなって並んで歩けなくなり一列になって進んだ。真紀は仲のよい女性たちの間に入っておしゃべりを始めた。どうやら洋平との間をからかわれているようだった。

頂上から眺める景色は箱庭のようで、中学校、二十戸ほどの民家、公民館も診療所もどれも懐かしい風景だった。ここは図工の時間にスケッチに来たり、体育の時間に登って来て帰りは駆けっこしたり、弁当持参で蕨を摘みに来た思い出の場所だった。

しばらく休憩した後、またまた正次の音頭で「星影のワルツ」を合唱して、一時間余りの山登りは終わった。

「ねえ、洋平。私、結婚しても働くつもりで習っていたタイプの資格が取れたから、今度は料理教室に行こうと思っっているの。洋平に美味しいものを食べさせてあげたいもの」

「でも、あまり無理をするなよ」

「今、勤めている親戚の食品卸会社は残業もないし、平気よ」

「僕も真紀に聞いてほしいことがあるんだ。今の仕事に不満はないけど……。将来は技術の仕事に就きたいと思って、来年から夜間部の機械工学科に行こうと思っっている」

「洋平らしいわね。でも、あまり私を待たせないでね。正次君と孝子は結婚したし、私も適齢期になっているのよ」

そう言うと、真紀は声を立てて笑った。

真紀の母の指図で二人は蕎麦打ちを始めた。母仕込みの真紀の料理は手際よかった。今年収穫したばかりという蕎麦粉を使った。麵策いっぱいの新蕎麦が香り高く出来上がった。

真紀の母が、今日掘ったばかりの里芋を味噌田楽にして出してくれた。香ばしい胡桃入りの味噌は実にくまかった。

洋平が帰る時間となった。いつものように、真紀の家から県道に出る暗がりので、二人は唇を重ねた。

「真紀、婚約だけは早めにしておこう。卒業したらすぐ結婚したい。今夜にも両親に話すよ。真紀もね」

「うん、そうするわ」

見上げると、山峡の空には天の川が鮮やかだった。

年が明けて、洋平の父は定年となり一家はA市に移住した。

洋平は機械メーカーに勤めながら、夜間部に通い始めていた。会社が定時になると、K市まで九キロ、五〇ccのバイクを飛ばして登校した。短期部だから三年で卒業できる。経済的には少しきついところがあるのは仕方がなかった。年齢的にこれ以上遅くなれば、それだけ真紀との結婚も遅くなると考えてのことだった。

それは三日ほど雪催いのつづく一月の末だった。



いつものように真紀から手紙が届いた。この頃文通の間隔が空きすぎるかな、と思っていた矢先だった。

封を切ろうとして、封筒の裏には真紀の名が書かれているだけで住所がなかった。何か不安が胸をよぎった。

封を切った。たった一枚の便箋の最後の一行に書かれた「さようなら」という文字が、洋平の目に飛び込んできた。背筋に冷たいものが走った。いつも、そんなことを手紙の最後に書く真紀ではなかったからだ。

手紙の書き出しは、

—洋平さん、ごめんなさい—

と、書かれてあった。いつもの会話や手紙の中では「洋平君」とか、「洋平」と呼び捨てにしているのに……。

—結婚できなくなりました。あなたのご両親と私の父が話し合ったようです。なぜなのか、私にもよくわかりません。

あなたは一人っ子。私には婿になる人でないとだめだと言っんです。

どう話しても、許してもらえません。いっそのこと、家を出てしまいたいと思います。いましがた、泣いている母を置いて行けません。

本当に、ごめんなさい。私を許してください。

短大は必ず卒業してくださいね。あなたからいただいたお手紙や写真は、全部燃やします。あなたもそうしてください。

今日まで……ありがとう。さようなら—

いったいどうしたと言うのだ。なぜこのような事態になってしまったのか。その夜、両親がそろったところを待って洋平は問いただした。

普段から寡黙な父は、

「先方から断ってきたのだから、どうにもならない」

と、言ったきり、後は何も言っはくれなかった。サチは、

「洋平のお嫁さんは真紀ちゃんと決めていたのに……。残念だね。洋平、こうなったら諦めるほかないわ」

そして、泣かんばかりに言った。

「男らしくきっぱり諦めて、くれぐれもみつともないことはしないで……」

洋平だけが知り得ない大きな闇のようなものがあって、そのことが二人の結婚の妨げになっているのだろうか？ 洋平はどんな障害も乗り越えて見せる。悲壮な覚悟であった。

まんじりともせず過ごした朝、洋平は真紀へ手紙を書いた。

—なぜ結婚できないのか、僕にはどうしても理解できない。僕は、約束したつもりだった。真紀と一生、ずっと暮らしていくことがすべてだと思っている。

当面はアパートで暮らして、休日には真紀の家の農作業をする。それではいけないというのか？

勝手を言うなら、亜矢ちゃんには悪いが、亜矢ちゃんが家を継ぐことはできないのか。

どうしても婿でなければならぬのなら、何としても僕は両親を説得する――

そして、どうしても直接話したいから、二月二日午後のバスでT駅まで来て欲しいと書いた。このままでは何としても引き下がれない、そう思う洋平だった。

T駅は単線の終点になっていて、ここから真紀の家までは、日に六便しかないバスしかなかった。

一時半のバスが着いたが、真紀は乗っていないかった。仕方なしに洋平は駅の近くを歩きまわっていた。三時半の次の便までは二時間ある。十人ほどでいっぱいになる駅の待合室には、落ち着いていられなかった。それでも、もしかしたら自転車で来るかも知れない。バスなら二十分だが、自転車でも四十分足らずで来られるはず。そう思って、遠くへは行かず、駅の待合室が見える場所にいた。

雪の降りそうな寒さが身に沁みてきた。やがて三時半のバスが着いた。心を躍らせて待ったが、やはり真紀は乗って来なかった。

出てくる都合がつかないのかも知れない。あるいは体調を崩しているのかも知れない。洋平の気がかりは尽きなかった。

いっそのこと、勇気を出して真紀の家まで行くべきだろうか。しかし、そのことが返って悪い結果にならないだろうか。くれぐれもみっともない行動だけはしてくれないなどと言うサチの言葉が脳裏をよぎった。

そうしているうちに五時五〇分の最終バスが着いた。やはり真紀は来なかった。それでも自転車で来る可能性は残っている。そう思いを強くして、駅の売店で牛乳とパンを買って食べ、駅の待合室に座って待っていた。

冬の夜は早い。すでにあたりは暗くなっていた。

―― 駆け落ち――

こんな言葉が洋平の脳裏をかすめていた。ポケットには電車賃ほどこしか入っていない。強引に駆け落ちするといっても、行く所はない。もの分りのいい叔母がU市に住んでいる。さしあたりそこに転がり込むしかない……。

誰にどんな非難を受けようとも、真紀と一緒になら、いっそ駆け落ちしてしまおうか？ そうは言っても真紀が承知しなかったら……。

待合室の時計が九時の時報を打った。

「お客さん、最終ですよ」

駅員がそう言った。ほぼ半日、待合室を出たり入ったりしていた洋平の様子に気づいていたのであろう。

切符を買い改札を抜けると、ホームには二両の電車がドアを開けたまま止まっていた。中に入ると、四、五人の客が乗っているだけであつた。横掛けの椅子の反対側に座つて、大きな籠と風呂敷包みを持った行商風の男が声を掛けてきた。

「どうやら雪になりそうですね」

「は……」

あいまいな返事をしたまま洋平は窓の外に目をやった。

さつきまでちらちらと舞つていた風花が、ホームの電灯に映し出されて、本降りの雪になりそうな気配だつた。

どうしてだろう。なぜ来てくれないのだ。手紙は間違いなく届いているはずなのだ。結局、二人の約束は、将来を誓つた愛は、こんなに薄っぺらなものだつたのか。それとも、真紀の女としての打算なのであろうか。いや、そんなことはあり得ない。そう否定しながらも、洋平は後悔していた。

こんな寒空に半日も待つていたことなど、何と愚かなことであつたらう。どんな展開になつても、男らしく真紀の家まで行くべきだつた。真紀の本音を聞きたかつた。誠意を尽くして話せば、両親も二人の結婚を許してくれたかも知れない。

確かに、洋平には経済力がない。夜間部への通学をやめて、残業も、夜勤もいとわず働いたとしても、洋平の給料だけでは余裕はまったくない。そうはしたくないが、真紀にも働いてもらう共働きをしたとしても、子供が産まれたらどうなるだろう。

人目がなかつたら、洋平は頭をかきむしつて泣きわめいていただろう。そして自分の不甲斐なさに吐き気のする思いでいた。

\*

洋平にとって故里である→町の村歌舞伎。開演は四時半。それまでにはまだ時間があつた。すでに三百人はいるだろうと思われる観客が待つていた。

四人の俳句仲間は、地べたに敷かれた青シートの座布団に座つて、持ってきたお菓子や売店で買ったおでんをつつきながらおしゃべりに興じていた。

そのとき二列ほど前の席から婦人が立つてきて、洋平たちの前に座つた。

「間違えたらごめんなさい。先ほどからお聞きしていたら俳句のお仲間のような感じが」

続けてその婦人は、

「洋平さん、洋平さんと呼びかけていらつしやるのはあなたでしょうか？ 私、真紀の妹の亜矢です。覚えていらつしやいますか？」

まぎれもなく亜矢であつた。三十数年、いや四十年ぶりながら幼い頃の面影ははつきりと残っていた。

俳句の世界では苗字はめったに名乗らず、もっぱら俳号である名前を呼ぶ。洋平は本名をそのまま俳号にしていたのだ。

「覚えていますとも。洋平です。よく判つてくれましたね。お元気でしたか？」  
「はい。洋平さんも。いろいろお話ししたいですわ。真紀姉さんのことで……。お芝居が全部終るのは八時頃だそうです。よろしかったら、その後、私のお店にいらしてください」

と、言うのと、亜矢は携帯を取り出して店に連絡しているようだった。

口上が終って、篝火が焚かれる頃にはもう夜の暗さが漂っていた。第一幕は『仮名手本忠臣蔵』の三段目。しびれるような三味線と義太夫の渋い声に、ときおり秋の虫の声も高まってきた。難しい内容の中にも笑いがあって、観客は楽しんでいるようだ。

幕間は小学生たちの合唱。真剣な表情がいい。村芝居ならではの演目だろう。かわいい孫の出演を観にくる年寄りも多そうだ。

続いての二幕目は評判の『白浪五人男』でおなじみの『稲瀬川勢揃いの場』だ。中学生たちの身体には大き目の衣装と、ぎこちない仕草と台詞には大喝采。おひねりが、パラパラと、次にはどざりと音がするほど舞台に投げられた。

殊に辨天小僧役の女の子は色白でぼっちやりとした美少女。洋平はその子に真紀の面影を見て、胸が高鳴るようで、歌舞伎や俳句どころではなくなっていた。

三幕目は『絵本太閤記』で、この頃にはみんな俳句がいくつかできたようで、見て欲しいと小短冊が洋平の手に回ってきたりした。

舞台がはねた後、食事をしながら句会を開く予定だったが、時間も遅くなってしまうから、後日あらためて開くということのみならずと別れてきた。

稲荷神社のある商店街を抜けていくと、亜矢に聞いていた和食処「桔梗亭」はすぐに分かった。店に入るとテーブル席を通り過ぎて奥の宴会用らしい大広間に通された。その一角に間仕切りがしてあった。

洋平と亜矢が席に着くと同時に、亜矢の亭主が板前の格好のまま現れて、土瓶蒸しを置いて言った。

「よくいらつしやいました。洋平さんのことは家内から聞いておりました。今年は好いお酒も入っているのですが、車ではお出しできませんね。何もお構いできませんが、どうぞごゆっくり」

そう言うのと板場の方へ戻っていった。

益子焼らしい小さな碗に土瓶蒸しを注ぐと、松茸の芳醇な香りが広がった。

まもなく亜矢の息子夫婦がお膳を運んでくれた。顔立ちが亜矢に似ている息子だった。

「お店のメニューでごめんなさいね。でもお客様には好評なの」

お膳には、栗おこわと大振りの碗に茶碗蒸し、赤出しのきのこ汁と香の物。洋平は遠慮せず箸を運んだ。甘みのあるほくほくとした栗をはじめ、素材の吟味された味わいがすばらしいものだった。それは「桔梗亭」の繁盛を伺えるものだった。

亜矢の心遣いなのだろう、テーブルの隅には赤いコスモスの一輪がコップ挿しになっていた。

食事が終わると亜矢が切り出した。

「洋平さん。あれからどうお暮らしました？ 今どちらにお住まいですか？ ご家族は？」

「ずっと独身です。両親はとうになくなりました。今はA市で暮らしています」

と、答えてから、洋平はなぜそんな答え方をしたのか自分でも分からないでいた。続いて亜矢が話し出した。

「私はごらんの通りよ。主人と息子夫婦とこの店をやっているの。孫の一人にはこの店を継いでもらいたいので、いま、東京の料理店で修行中です。開店した頃は夢中で働いたけど、この頃嫁がやってくれるようになったので少し余裕が出たところです。」

姉に比べて私ばかりが幸せになったようで気が引けると言いながら、亜矢の長い話が始まった。そして是非とも洋平に聞いて欲しいと言った。

「今、姉は胃とすい臓が悪くて入院しているのよ。昨日も見舞いに行きましたけど、連れ合いを亡くして八年ほど経っているせいもあって、すっかり弱気になっていたわ。」

「ご存知かしら？ 洋平さんと姉との結婚がうまく行かなかったのは、親たちの話し合いの結果だったらしい。あの時、どうしても父が許さなかったのは……。」

洋平さんは一人っ子。姉も婿をとって家を継ぐ長女。それがどうしても譲れない両家の理由だと……。

そんな表向きの理由とはまったく違って、本当は両家の遺伝の心配だったの」

そう言われて、洋平にはうすうすだが思い当たることがあった。祖母の話から家系を辿ってゆくと、洋平の家は、北関東の小藩で十数家の同姓の一族であったが、身分は低くほとんどが足軽だった。家禄を守るために何度となく近親の婚姻が繰り返されたようで遺傳的な因果もかなり発生していたらしい。さすがに明治期にはこれらの婚姻はなされなかったが、時代が下ってまたまた洋平の両親は従兄妹同士だった。

実は洋平は一人っ子ではなかった。六つ上の姉がいたのだが、知能も身体も発育が十分でなく六歳で早世していた。

やがて生まれ代るように洋平が生まれたのだった。

一方、真紀の母は初産から十年ほどの間に生まれた子は死産だったり、一歳も育たず亡くなっていたのだ。その上、真紀と亜矢の間にも一度流産をしていたのとだった。

その母、真紀の祖母方にも同じような繰り返しがあつたらしい。だから、真紀の両親は遺伝的な繰り返しを心配をしていたのだった。

そうした因果を持つ二人が結婚しても、将来、どのような子供が生まれ、どんな苦勞をするか分からない……。

そのことが二人の別れを決定付けていたとのことだった。洋平の母サチだけは、心配なら子供を産まなくていい、世の中には子供のいない夫婦はいくらでもある、養子ももらえばいいことだと最後まで二人の結婚を勧めたようだったが、結局だめだった。

「私は、洋平さんを本当の兄さんのように思っていたから、二人が結婚しないことになったと聞いて、どうしても理解できなかった。姉と私には男兄弟がいなかったから、洋平さんが兄さんになってくれたら、どんなによかったかと……」

亜矢はためいきをつき、そして続けた。

「母が亡くなる前、私に話したことがあるの。」

―姉が洋平さんにお別れの手紙を書いたことがありましたよね。姉は、あの手紙を読んだ洋平さんがきつと飛んできてくれると思っていたの。確かに洋平さんからすぐお手紙をいただいたんですってね。

でも、そのお手紙は結局姉には届きませんでした。姉が早く諦めるようにと、父が隠してしまったようです。

洋平さんからの連絡を一縷の望みにして待っていた姉は、あんな手紙を書かなければよかつたと、それから毎日泣いていました。

今のように電話や携帯がある時代ではありませんでしたから、手紙以外の連絡方法がありませんでしたよね。

それから半年ほどして、親戚の薦める縁談を受けて結婚したの……。

家を継がなくてはならないという、表向き事情に反発するように、姉は強引に結婚してしまつたわ。まるで、経済力のある人なら文句ないでしょう――とばかりにあれは両親に精一杯の抵抗だつたと思つています。

両親からは祝福されない結婚だつたし、嫁ぎ先からは妊娠が確かめられてからという具合で、とうとう結婚式も披露宴も挙げられないままでした。

あくまで子供を産むことを嫌がった姉は、三年で離婚したわ。というより追い出されるような離婚だつたわ。子供を産めない嫁ではと言われた上に、旧家で厳格な家風にはなじめなかつたようね。身体もすっかり弱つてノイローゼになっていたの。

洋平は初めて聞く話であつた。

「それからすぐに、十五歳も年上の男性を紹介されて結婚したの。このときも両親の反対を押し切つての結婚でした。前の奥さんが二人の子供を遺していったので、いきなり二人の子持ちになつたの。」

子供は絶対産みたくないと思つていて、少し自棄になつていた姉にはそれでよかつたのね。子供たちはもの心がついた頃だつたから、なかなかついてくれず苦勞

をしていたようね。それに農家だったから、農作業と家事と子育てと、息つく暇もなくまるで働き蜂だったわ。

でもそのことがかえって気晴らしになったのでしょいか、だんだん元気を取り戻して、子供たちが高校を出た頃には、もう、立派な農家のおばちゃんになっていたわ。

連れ合いも朴訥で優しい人だったし、生活も落ち着いて、力強く生活していたの。私も姉がすっかり元気になっていて安心していました。その頃からは私とはよく行き来していました

黙って聞いている洋平には、驚くことばかりだった。

「そんなわけで、私有家を継ぐことになりました。割烹旅館の板前だった主人と結婚しましたの。休みの日は両親と私たちで農作業をしていました。

主人が独立してこのお店を持ったのは、三十五歳のときだったわ。季節の野菜は両親の畑で採れたものを入れてもらって。お米もそうだったわ。

両親が亡くなってからは、親戚に農作業をお願いしているの」

そのとき、息子夫婦が現れて、デザートにと葛切りをテーブルに置いた。お店は看板の時間だから、何時まででもゆっくりしてください、と告げていった。

葛切りは甘みを抑えてあって、先ほどいただいた料理の味を損なわない美味しさが感じられた。

「八年前、姉は連れ合いを亡くして……。

そんな頃だったわ。同級生の正次さんから洋平さんのことをお聞きしたのは……。

ごめんなさい。なぜか、洋平さんがあれからずっと結婚しないで独身だと……」

それからは、意外な話の展開だった。

「私ね、あるとき、冗談で言ったのよ。今からでも、洋平さんにお嫁にもらってもらえよと……。姉は今更許してもらえないことではないし、きつと私を憎んでさえいるはずよ、と淋しそうに笑っていました。

そしてね。高校時代からの写真や洋平さんからの手紙をたくさん出して見せたの。そう、手紙の束は五十通くらいあったでしょうね。

結婚できないと諦めたとき、写真や手紙は全部燃してしまったと聞いていましたけれど。実際は……。そうではなかったのね。

ああ、姉は今でも洋平さんを愛しているのね。と、強く思いました。そして少女のような姉の気持ちをいとおしく思いました」

「……」

洋平は何も言えなかった。ただ黙っているしかなかった。

「それで、勝手なお願いなんですけれど……。一度姉を見舞っていただけられないでしょうか？ きつと喜んでくれると思います。今更とお思いでしょうけれど……」

と、洋平の顔を覗きこんだ。

「でも、真紀さんの心を乱すことになってはいけませんから。突然のことで、私もどうしていいのか、考えがまとまりません」

そう答えたものの、心を乱すのはむしろ自分の方だと思おう洋平だった。実際に真紀の顔を見たら、何を言ったらいいのか……。どう言ったところで若い頃の二人に戻れるわけではない。半世紀にもなる歳月はあまりも長すぎた。あの頃の純粹で美しい時間を大切にする―それだけでいいのではないか。

それを乗り越えて、また二人の時間を取り戻せたとしても、果たして、何のこだわりもなく生きていけるだろうか……。

残念そうな顔をする亜矢に礼を述べ、板場の家族みんなにも声を掛けて店を出た。会社を定年で辞めて三年。今、まったくの一人暮らしの中で、趣味の俳句に情熱を燃やしている洋平だったが、家族がいけないという淋しさがなければなかった。

長い会社勤務の中で、結婚の機会がまったくなかったわけではない。あるときは、上司から薦められた縁談もあったし、職場の部下の中からも交際を迫られたこともあった。

しかし、新しい製品を造りだすための、自動マシンを考案する―その仕事に熱中し、そのことに情熱を燃やしていた。

中年になってからも、俳句を通じて近づいてきた再婚目当ての女性もいた。しばらく交際していたが、俳句のほかは、正月休みでさえ、仕事のアイデアが浮かぶと会社にこもりきりになる洋平にあきれて、いつか去っていった。

今、真紀に再会して、許されるものなら一緒に暮らしてもいいのだ。誰にも気兼ねすることもない。しかし、それでは意地を張って独身でいたことが、何の意味も持たなくなる。

趣味とは言え、俳句の世界でも家族を詠めないということは、どこか半端な気持ちがある。むしろ、家族愛を詠めないのは、俳人として欠陥でもあろうとさえ思っていた。そんな俳人としての葛藤も、真紀とのことで勇気のなかった慙愧の念を持ち続けていたのだ。

だから、仲間が詠んだ妻子や孫の俳句に、評価を加えるなど自分でも許せないでいる。

冬の訪れが間近い空には、星が冷たく冴えた光を放っていた。

\*

真紀が亡くなってから二ヶ月が過ぎ去っていた。

酒はほとんど呑むことのない洋平だが、こんなときは真実酒を呑みたいと思った。呑んでどうなるものではないかも知れない。呑んで一時でも、何もかも忘れること



ができるなら、とことん呑んでみたかった。そんな悶々とした日々の暮らしの中で、ようやく一つの決心にたどり着いた。それは果てしない旅に出ることであった。

その日、猿岩山の頂上までの道は、クラス会で登ってから四十年も経っていたからすっかり様子が変わっていた。軽トラックが入れるほどの道幅に整備されていた。それでも沢からの急峻な道は草が長けていて昔を思い出させてくれた。

洋平は山間の集落を一人眺めていた。

集落に見えていた多くの藁屋根はことごとく瓦葺になっていたし、南北に走る県道は舗装されていた。麓にあった中学校が廃校になってすでに十年が過ぎていた。思い出多い校舎は無い。日差しの中で草生す校庭跡の広さだけがその名残りを見せていた。

それでも連なる山々の形は昔と変わりなかった。洋平の心の中も若いときの、真紀に寄せる思いは熱いままだった。

この日から帰ることのない旅に出ることにした洋平だった。このまま成田からネパールのカトマンズ行きに搭乗するのだ。まったく当ての無い旅になりそうだ。ネパールの村々からヒマラヤを眺め、多くの巡礼たちと同じ宿に泊まり同じものを食べようと思う。ネパール、モンゴル、ブータンそしてシルクロードへの旅だ。

どこで不慮の事故に遭い、どこで病に倒れて命を落とすことになるか分からない。それはそれでいい。そんな運命も自分らしいと思うのだった。

両親と姉の墓を残していくのが唯一の気がかりだが、寺へは永代供養の手続きを済ましてきた。

すでに旅支度をして来ていた。シオルダーバックの中にはハガキ用のスケッチブックと十二色の色鉛筆が入っている。旅の先々で徒然に詠んだ俳句を書き添えようと思っ用意したが、誰にも送る当てのないハガキになりそうだ。

今では真紀のいない日本に何の未練もなかった。と、いうより真紀のいない日本にすることに意味を感じなかった。一人旅ではあるが、今となつては真紀との二人旅でもあるのだ。写真は一枚も持っていない。なまじ写真などないほうがいい。かえって胸に刻んだ面影がそれだけ鮮明になる。そう思う洋平であった。

麓の家々の柿若葉が鮮やかに輝き、山中のあちこちでしきりに夏うぐいすの鳴く声がしていた。故里の、この美しい風景の見納めるときだと唇を強く噛む洋平だった。

さわやかな初夏の風が猿岩山の頂上に吹き渡っていた。

「これからは、ずうっと一緒だよね」

風の中に、真紀の声を確かに聞いていた。

(終り)